



Title	二神孝一先生
Author(s)	祝迫, 達郎
Citation	大阪大学経済学. 2023, 73(1), p. 45-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91715
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



二神孝一先生

本学名誉教授二神孝一先生は2023年3月24日、病のため64歳の若さで逝去されました。二神先生は1982年3月に京都大学理学部を卒業され、1987年3月まで神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程で研究をされました。同年4月松山商科大学経済学部講師に着任され、1989年4月松山大学（旧松山商科大学）経済学部助教授、1991年4月立命館大学経済学部助教授、1997年4月大阪大学経済学部助教授を経て、2000年3月大阪大学博士（経済学）の学位を取得され、同年6月同大学院経済学研究科教授に昇任されました。その後、2011年8月から2013年8月には大学院経済学研究科長・経済学部長を務められ、大学院経済学研究科・経済学部の発展に尽力され、2021年3月に退職され大阪大学名誉教授の称号を授与されました。退職後、同志社大学経済学部にて特別客員教授として移籍されました。

二神先生はマクロ経済学、特に経済成長理論で世界的な貢献をされてきました。経済成長理論は1990年代、内生的経済成長理論という新しい理論で急激に発展しましたが、この発展の一翼を成す研究をされてきました。またマクロ経済学の入門・中級・上級の新しいテキストを執筆され、日本のマクロ経済学の教育・研究レベルを向上させる貢献をされてきました。しかし意外にもマクロ経済学・経済成長理論の研究を始められたのは博士後期課程を修了され就職された後からでした。上記のように理学部を卒業され大学院から経済学の世界に入られたわけですが、大学院ではマルクス経済学の数理分析で有名な置塩信雄先生の下で研究をされました。当初の研究はハロッド・置塩型投資関数という標準的なマクロ経済モデルや経済成長モデルとは異なる設定で資本主義経済の安定性を分析するという研究でした。その後同門の先輩である三野和雄先生（現京都大学経済研究所）の影響を受け、動学ゲーム理論およびミクロ的基礎付けを持つマクロ経済モデルの研究にシフトしていかれたようです。1989年に財政再建の問題を微分ゲームの手法を用いて研究され、最初のマクロ経済学での研究成果を出されました。この研究はJournal of Public Economicsという公共経済学のトップジャーナルに掲載されま

した。その後、経済成長理論で多くの研究成果を出されるようになるわけですが、特に大きい転換点は柴田章久先生（現京都大学経済研究所）と共同で研究を行い1993年にScandinavian Journal of Economicsの経済成長理論の特集号に掲載された研究だと思います。この研究は公共投資と経済成長を分析した研究です。所得税で公共投資を賄うとき、所得税率を上げれば公共投資が増え公共資本が増加し経済成長率が高まりますが、所得税率の上昇は課税後利子所得を減少させ貯蓄意欲を減少させてしまいます。そのため税率と成長率は逆U字の関係になり、ある税率で成長率が最大になります。このような経済成長を最大化する税率の研究は同時期にBarroが先にJournal of Political Economyに発表してしまいました。しかしBarroの研究では公共投資ではなく公共支出が直接経済の生産性を上げるという考え方でした。現実には公共支出＝投資によって蓄積された道路・橋・港湾など公共資本が経済の生産性向上に大きい影響があるはずで、二神先生たちの研究は、内生的経済成長理論の枠組みの中で公共資本蓄積を考慮した最初の研究になりました。しかも最適税率に関する結果が大きく異なります。公共支出が生産性を上げるBarroの設定では経済成長率を最大化する税率が経済厚生も最大化していたのですが、公共資本によって生産性が決まる設定では、経済成長率を最大化する税率より税率を下げた方が経済厚生を改善することを示しました。最適政策を考える上で非常に重要な結論と言えます。この研究の2023年4月時点での引用件数は1000件近くあり今後も増えるものと思われます。このように重要な研究成果を様々な応用分野で出されてきました。財政に関してはもちろん、資産価格バブル、社会的地位選好、特許保護、人口転換、再生資源、行動経済学など多岐に渡るテーマをマクロ経済学・経済成長の視点で研究され、査読付き国際学術雑誌に50以上の論文を掲載されてきました。現在も多くの研究が進行中でした。

精力的に研究を行いながら同時に多くの院生を指導されました。先生が主査として指導され博士号を取得した研究者は25名もいます。指導熱心で講義以外にも院生指導のための研究会を定期的に開催しておられましたが研究会後は必ず飲みに行かれていました。先生ご自身がお酒好きで院生と飲むことも好きだったとは思いますがその環境が結果的に研究を含めて様々なことを学び、交流できる場になり、多くの研究者を育てることができたのだと思います。私も一緒に飲みながらお話しさせていただくことで研究の根本的な考え方や姿勢を学ばせていただいたように思います。

2019年9月にゼミのOB・OGで還暦記念コンファレンスを企画し開催しました。2021年3月に本学を退職される際は最終講義をしていただきました。次は先生が移籍先を退職されるときに退職記念コンファレンスをとゼミのOB・OGで話していたのですが残念ながら開催することができなくなりました。最終講義で説明されていた研究も途上でした。早すぎる先生のご逝去が残念でなりません。指導教官になっていただいた日から多くのことを教えていただきました。学恩に感謝申し上げますと共に先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（祝迫達郎 大阪大学大学院経済学研究科教授）